



神聖かまってちゃんと死刑されたソクラテスの
魂のゆくえ

———ロックバンドとソクラテスの死に方

偽善者のみなさんこんばんわああああああああああああ。

わたしは、この記事を読んでしまったあなたに、ここでしか得られないものを得てかえってほしいと思っている。

ロックを趣向しているものは偽善者である。

しかし、われわれの優れているところは、「自分は偽善者だ」ということを自覚していることだとわたしは思う。

↓

ギリシャの哲学者ソクラテスも似たようなことを言っていた。かれは、「無知を自覚していない者はばかである」と結論づけた。書物『弁明』によると、ソクラテスは知者と呼ばれる者たちと実際に会って話をする。すると、知恵者ではないことに軒並み気づいてしまったという。詳しくはこう記述されている。



「この人間より、わたしは知恵がある。なぜなら、この男もわたしも、おそらく善美のことがらは、何も知らないらしいけれども、この男は、知らないのに、何か知っているように思っているが、わたしは、知らないから、そのとおりに、また知らないと思っている。だから、つまりこのちょっとしたことで、わたしのほうが知恵のあることになるらしい。」



ソクラテスには知者とちがって「知らない」という自覚がある。「それは知らない」と人にも言ってしまふ。自分の無知を自覚している分だけ、自分のほうが知者じゃね？と思ったわけだ。

これが哲学史上で有名な、ソクラテスの「無知の知」である。と、ここまでが学校の話。

これには続きがある。↓

あいてが知者ではないと分かったとき、ソクラテスはなんと！「おまえは知恵があると思っているけれども、そうではないのだということを、はっきりと分からせてやろうと務めた」と『弁明』に書かかれている。

怖い。ようするに、「あなたは自分のことを賢いと思っているようだが、ほんとうはばかですよ」と相手に告げるのだ。それも徹底的に追いつめる。「なんで？」「なんで？」を連発したらしい。これは相当うざい。



↓

『一日で学び直す哲学』という著書の甲田純生によると、実際、哲学者というのは、そういうことをついついしてしまう人種らしい。この話を聞いたとき、わたしがまっさきに頭に浮かんだのはロックミュージシャンである。

怒髪天のボーカルである増子は「ロックはテロ」「世間への嫌がらせ」といつていた。正直さがこの世を形成しているわけではない。あえて言葉にしなかったり本心ではないことを行うことによって事が上手に動くことがある。それが社会性である。

しかし、ミュージシャンはそこに一言なにか言ってやらないと気がすまないのだ。ソクラテスと共通する。

たとえば、小沢健二は若いことはかなりの武闘派だった。↓

たとえば、小沢健二は若いことはかなりの武闘派だった。取材にまったく協力的でなく、ふざけたり本読んだりしてまともに答えなかった。音楽に詳しくない人を見下して「あんたそれでも音楽ライター？」みたいな態度をよくとっていた。ある雑誌を読んでいたら女性インタビュアーがそれで泣かされていた。

自分の仕事の不成立さとアイデンティティの崩壊がそうさせたのだろうか。だからって泣かなくてもいいと思うが。見た目カラフルだけど中身は毒、みたいな。小沢は合成着色料だらけのジュースみたいなたとえを自身でしていた。

ほかには、歌番組で司会の和田アキコに「フリッパーズギターのドラムです」とか答えていたし、そういう生放送向きじゃない危うさがあった。



音楽と人
ONGAKU TO HITO: APR. 94
500YEN

4

大槻と小沢、
「わけんじ」
カルト頂上対決!

★スター・チルドレン
宮本浩信
近藤浩志
久野真季子
渡辺典男
中川ひろたか
香取真久
藤内秀雄
マリア

わたしもそのようなロックテロを仕掛ける者でありたいと思っているがなかなかむつかしい。社会性を捨てなければいけないからだ。それをしてしなければロマンを成し得ない。

ロックテロにはロマンがある。世界を変えよう
というロマンだ。



これには危険がともなう。

ソクラテスをみてみるとよく分かる。かれは「おまえの化けの皮をはがしてやるぜ」と次々に賢者たちのプライドを砕いていった。その結果なにがおこったか。



ソクラテスは死刑になったのだ。



「なんで?」「なんで?」としつこく聞きいて、しょうがないから答えてやるよと重い腰をあげて答えてあげたら、次はそれについて「なんで?」とソクラテスはいうわけだ。それにも答えるとまた「なんで?」が返ってくる。相手の立場になるとこれはうっとおしい。

繰り返されるその問答にうんざりして、ちょっとまってくれよといったらソクラテスに「やれやれだぜ、あんたは知者じゃなかったようだな」と言われてしまうのだ。

これはうざい。

↓

しかし、視点をかえてみる。自分が当時のボンクラな若者だったらそのソクラテスの問答をみてどう思うかと考えると、最高に痛快だったはずだ。

権力も名声も人徳もあるとされている人間たちがソクラテスの問答の前に次々に敗れていくのだ。自分たちの前にある知者という権力の壁が崩れていく。その風景が楽しくないわけがない。

当時のボンクラな若者からしたらヒーローだったはずだ。「ソクラテスさんかっけー」という感じだろう。

↓

これはロック界限と重ね合わせることができる。なっとくできない社会や先人たちにNOやYESを突きつける姿、そのカウンターがカタルシスを生む。

事実、ソクラテスは国家宗教を否定し、青少年を惑わしたとして死刑になっている。これは熱い。青少年を惑わしたということがとくに熱い。

ロックンロールも若者を惑わすからだ。たとえば、甲本ヒロトも「若者を騙すのがロックンロールだよ。おれだって騙されたもん」といっている。つまり、体制側にNOを突きつけて若者に支持されるようなものこそロックなのだ。神聖かまってちゃんがそれにあてはまる。



↓

先人たちから褒められていくバンドは数多い。しかし、神聖かまってちゃんはちがった。アウトサイドだった。それは既存のロックバンドの道筋とは違うことをしたからだ。インターネットをつかって、楽屋の生中継、音源のフルのアップロード、ライブのゲリラ的な生中継などを行った。

しっかりメジャーのレコード会社からCDを出して活動していたバンドからしたら反則技の数々だ。それが社会からアウトな気持ちになってるボンクラな若者からしたら痛快だった。

若者は先人たちからしたら褒められるものではない。権力者たちからしたら若者の突き上げは自分たちの身をおびやかす存在だからだ。表では理解してるふりして「よしよし」と頭を撫でていても、いざ自分の敵に回ると嗅ぎつけた瞬間、そのまま首を絞めて殺す。

それが奴らのやり方である。それが社会である。

↓

それを思うと、若者というのはその存在からしてすでに世界からアウトなのだ。もとある世界を脅かす存在だからだ。



しかし、世界はだれのためにあるのかと考える。世界は内でだけ構成されてはいない。内と外の両方あわさってある。アウトにいる若者にとっての世界でもある。神聖かまってちゃんはそれをインターネットとバンドで世界を自分のものに塗りかえるロマンをみせてくれた。

若者がもっている手札は少ない。コネもないし金もないし権力もない。ここを読んでいるものならば友人だっていないだろう。そんな人間がこの世界で生きるためにどうするか。それを神聖かまってちゃんは教えてくれる。それは、自分たちが使えるものはなんだろうとつかってしまえ、ということだ。

もしも卑怯な手法、アウトな手法にみえてしまうなら、正解の証である。正当な手法というのは先人にとっての正当であって、若者にとってみればそれこそアウトな手法なのだ。

↓

ほんとうに正当な手法というのならば、知者である権力者たちは得たもの持っているものをすべて捨てて若者と同じスタート地点にたつことがひつようだろう。それをしないのだから若者からすると正当な手法もなにもなし、「それは邪道だ」と批判することもおかしいことだろう。

持っている手札が違うのだからそれを使い続けている知者たちこそ邪道である。

↓

アウトにたっているバンドは意外に少ない。いまの時代、バンドをやっていることはアウトなことではないからだ。むしろ、褒められる。

神聖かまってちゃんは大人からすると子どもたちを騙す危ないバンドにうつっている。しかし、そもそもバンドというのはそういうものだろう。大人たちからNOと言われなければいけない。だからいつの時代も若者はバンドに心を重ねてしまう。

かれら神聖かまってっちゃんにはそれがある。↓

かれら神聖かまってっちゃんにはそれがある。時代から託された世界を変える力が継承されている。それをみていると、暗い部屋で独りでいるわたしたち、アウトサイドにいる者すべてにその力が備わっているのではないか、と思えてくる。

わたしたちの存在が社会からNOだからだ。そういう者こそ世界を変える。神聖かまってっちゃんはそんなロマンをみせてくれるバンドである。←

うおお

神聖かまってちゃんと死刑されたソクラテスの魂のゆくえ ーーーロックバンドとソクラテスの死に方

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ